

2025年度 成人科テキスト

ぶどうの木

第2号



神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

創世記 1 章 7-8 節

名前

常盤台バプテスト教会 「教会の約束」

私たちは、神のめぐみによってイエス・キリストを主と信じ、バプテスマをうけて、主の教会に加わったので、聖霊の助けにより喜んで互いにこの約束をいたします。

私たちは、聖書が信仰の規範であることを信じ、その教えに従います。

私たちは、この教会が人によって成ったものでなく、神によって成ったものと信じます。

私たちは、主の日の礼拝を守り主をたたえ、教会の集まりにつとめて出席し、バプテスマと主の晩餐の二つの礼典を守ります。

私たちは、教会のきよくなること栄えることを祈り、主にある兄弟姉妹の愛をもって愛しあい、互いの喜びと悲しみを共に分けあいます。

私たちは、この教会をささえ、全世界に主の福音をのべ伝え、神のみむねの行われるために、喜んで奉仕し、献金をいたします。

私たちは、日々の祈りと家庭の礼拝につとめ、神よりあずかった子供たちをみむねにそうように教え育てます。

私たちは、きよい心と正しい行いをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

私たちは、主と会う日まで、この約束を守ります。



6/15	第7課	「唯一の規範」	・・・	P.4
6/22	第8課	「心を開いて、耳を澄ませる」	・・・	P.6
6/29	第9課	「従い続ける人生のために」	・・・	P.8
7/13	第10課	「キリストが地上に残された教会」	・・・	P.10
7/20	第11課	「人によって成ったものでなく」	・・・	P.12
7/27	第12課	「神によって成ったものと信じます」	・・・	P.14

執筆担当：第7～9課 郷 健人 兄 第10～12課 郷 秀男 兄

表紙イラスト：友納 聖子 姉

第2号の参考図書

- 「バプテストの教会契約」 1993年 村椿真理 ヨルダン社
- 「教える喜びと学ぶ喜び」 2009年 朴永基 いのちのことば社
- 「バプテストの信仰」 2015年 日本バプテスト連盟宣教研究所
- 「人生を導く5つの目的」 2015年 リック・ウォレン PDJ
- 「聖書教理がわかる94章」 2016年 J・I・パッカー いのちのことば社
- 「バプテスト教理問答書」 2004年 鈴木昌 訳編 東京聖書教会
- 「10代から始めるキリスト教教理」 2022年 大嶋重徳 いのちのことば社

いつまでも残るのは

いつまでもこのころのは

— しんこうきぼうそしてあい

そのなかでいちばん

すぐれているのはあいです

1. わたしのこころが— イエスのあいに根ざ
2. わたしのおもいが— 主のみにたまにいたがう

すようにつく— り変えられる— いっ
よ— うにみちびいてくださる— すべ

ほうてきなる主のあわれみ
てにまさる主のあいが

ひまわり
向日葵

作詞・作曲 長沢 崇史

D G A D G D

か みさまがー く れ た の い の ちー すば ら し いー か ぞ く にー すば
ひ まわりをー よ く 見ー て ら んー ほ ら ど こ - か た い よ う にー に

Em A D G A D

ら し い と もー い つ だ っ てー え が お た や さ ずー た い
に て い な い か いー ぼ く た ち もー 主 だ け 見 上 げ てー イ エ ス

G D Em A D

せ つ にー そ だ て てー く れ た の い の ちー し お
さ ま にー に た も の にー な っ てー い き た いー

G D F# Bm

れ て 枯ー れ 果 て た お れ て し ま っ て もー た ね は き え ず にー

Em A D F#m

ま た も う い ち ど は な を さ か せ るー - - - た い よ う に 向 か い ま っ す

Bm F#m G D Em A7 D A

ぐ に そ だ っ そ ん な す が た を こ こ ろ に う つ し ぼ く ら も つ よ く 生 き

Bm A G D Em A7 D

てー 行 こ う た だ か み さ ま を 見 上 てー - ひ ま わ り の よ う にー

第7課 「唯一の規範」

～6月の約束文～

私たちは、聖書が信仰の規範であることを信じ、その教えに従います。

キリスト教と言えば、聖書。というイメージは、ノンクリスチャンの方でも大半が持っておられるでしょう。そのように誰もが重要な書物として認識している聖書について、あえて「信仰の規範であると信じる」と述べるのは何故でしょうか。そもそも聖書には何が書かれ、バプテスト教会はどのように位置づけているのでしょうか。

テモテの信徒への手紙Ⅱ 3章14～17節

だがあなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだかを知っており、また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです。

1. 全ては神の導きにより

聖書は、旧約聖書39巻と新約聖書27巻、合計66巻で成り立っています。旧約聖書は紀元前1,500年から400年頃に、新約聖書は紀元50年から100年頃に書かれており、著者は40人ほどと考えられています。約1,600年という長い期間の中で、預言者や学者、イエスの弟子たちや使徒パウロなど、生きた時代も背景も異なる人々が書いているにも関わらず、聖書は互いに矛盾することのない、すばらしい統一性を持っています。それは、テモテⅡの3章にある通り、「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ」たからです。著者たちは皆、自分の書いていることが後に「聖書」として編纂され、世界中で読まれることになることは想像していなかったでしょう。しかし全てをご存じである神さまが、著者一人ひとりを導き、その当時の読み手だけではなく今の私たちに必要な御言葉として与えて下さったのが、聖書なのです。

2. イエスさまを証しする

ヨハネによる福音書5章39節

あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。

この箇所ではイエスさまが言われた「聖書」とは、「旧約聖書」を指します。イエスさまがお生まれになる以前に書かれた旧約聖書は、神さまが救い主（メシア）を送ってくださるとした約束を中心に書かれており、つまりは救い主イエスさまについての証しそのものなのです。イエスさまの歩みや教えから成る福音書、

弟子や使徒たちが書いた新約聖書は、言うまでもありません。聖書とは、どこを切り取ってもイエスさまについて証ししている書と言えるのです。

ルカによる福音書 24章44節

イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。

3. バプテストにおける聖書

私たちのルーツの一つである英国のパティキュラー・バプテストは、「第二ロンドン信仰告白」（1677年）で、聖書について次のように記しています。

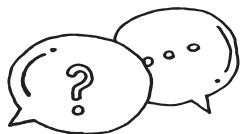
第一章「聖書について」

聖書は救いの知識、信仰、および服従のすべてについての唯一の、十全で、確実また誤りない規範である。自然の光また創造と摂理の御業は、人が弁解できないほどに神の善と知恵と能力とを明示している。しかしそれらは救いに必要な、神およびその御旨についての知識を与えるに十分ではない。したがって主は、いろいろな時期に種々の方法で、ご自分の教会にご自身を啓示し、御旨を宣言し、後には真理をよりよく保存し、宣布するために、また教会を肉の腐敗やサタンおよび世の悪意に対して一層確実に確立し、かつ慰められるために、それらをことごとく文書に託するのをよしとされた。これが聖書を最も必要なものとし、御旨をご自分の民にあらわした神の従前の啓示方法は今は終わっている。(鈴木昌訳)

たとえばふと空を見上げて自然の大きさを感じた時や、日常の様々な出来事を通して、神さまを近く感じることはできるでしょう。ただ、それだけでは神さまの御心を十分に知ることは出来ず、私たちは聖書に記された真理を通して、真の神さまに出会っていく必要があるのです。自分勝手な神さま像を作り上げないという意味でも、書物という後世まで伝わる形で聖書が与えられたことは、計り知れない恵みです。

カトリックや一部のプロテスタント教会では、「使徒信条」と呼ばれる2世紀頃に作られた不変の信仰告白が重んじられているのに対し、バプテスト教会で使徒信条が用いられることはほとんどありません。バプテスト教会も教会ごとに「信仰告白」や「教会の約束」は定めていますが、これらは使徒信条のように不変のものではなく、時代と共に見直されるべきものとされています。それは、不変のものは聖書のみであり、聖書のみが信仰の規範であると考えているからです。

「教会の約束」を通して「聖書が信仰の規範であると信じる」と述べる時、私たちは「他の何物でもなく、ただ聖書のみを私たちの信仰の規範とします」と、神さまにお約束しているのです。



- 聖書に出会う前、生きる上での規範とするものはありましたか
- 聖書を自由に読めない信仰生活を、想像できますか。

話してみましょう • 「信仰の規範とする」とは聖書とどのように向き合うことだと思いませんか。

第8課「心を開いて、耳を澄ませる」

～6月の約束文～

私たちは、聖書が信仰の規範であることを信じ、その教えに従います。

初めて聖書を読んだ時から、書かれていること全てが理解しきれた、と言う方はまずいないと思います。それどころか、たとえ何十年読み続けたとしても、常に疑問や理解の難しさにぶつかるのが聖書ではないかと思います。では、そのような私たちは本当に、聖書を信仰の規範にしていると言えるのでしょうか。足りないところだらけの私たちが、どのような思いや姿勢で聖書と向き合えばよいのか、共に考えてまいりましょう。

ペトロの手紙一 1章23～25節

あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わる事のない生きた言葉によって新たに生まれたのです。こう言われているからです。

「人は皆、草のようで、
その華やかさはすべて、草の花のようだ。

草は枯れ、
花は散る。

しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。

1. 霊の体への“栄養”

私たちの肉体は、食事を通して栄養を得ることで活動させることができます。そして聖書は、私たちには肉体だけでなく霊の体を与えられていることを語ります。

コリントの信徒への手紙一 15章44節

自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。

この、霊の体にとっての“栄養”となるのが聖書の御言葉です。

肉体にとって、どのような栄養が必要で、そのためにどのような食事が適切なのかは科学的にほとんど明らかにされていると思われます。しかし、誘惑に負けてなかなかその通りの健康的な生活ができない弱さも私たちは抱えています。

霊の体についても似たようなことが言えます。書店に足を運んだり、インターネットを開いたりすれば、悩みや迷いを抱えた人に向けた無数の言葉が溢れています。その中には、聖書よりも理解しやすく、また聖書ほどには厳しい言葉も出てこず、自分の心を満たしてくれるように感じるものがあるかもしれません。それでも、霊の体にとって聖書に勝る“栄養”は無い、と私たちは「教会の約束」を通して宣言しているのです。もちろん聖書以外の書物が全く不要ということではありませんが、人が人に向けて書いた言葉が、神の言葉に勝ることはないのです。

テサロニケの信徒への手紙一 2章13節

このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。

2. 読みながら、聞く。

私たちが聖書を読む姿は、外見的には他の書物を読む姿と変わりありません。しかし、読むにあたっての心構えは大きく異なります。

ローマの信徒への手紙 10章17節

実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです

ペトロの手紙 2章2節

生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。

聖書は、行為としては「読む」ものでありますが、本質的には「聞く」ものなのです。他の書物であれば、「どれどれ、どんなことが書いてあるのかな」と評価するような思いで開くこともあるかもしれませんが。しかし聖書を読む時は、赤ちゃんが親に身を委ねるような素直さで、心を開いて、神さまがいま自分に何を語られているか聞こうとする姿勢が大切なのです。

3. 分からないことがあっても

聖書の中で、特に好きな箇所や大切にされている箇所がある方は多いでしょう。一方で、この言葉はどうしても理解できない、受け入れ難い、信じられないといった思いを持つ箇所も、それぞれにあるかもしれません。こうした“つまずき”に対して自分なりに考え、理解しようとすることも大切ですが、何よりも大切なのは「それでも読み続ける」ことです。聖書は66巻全てを通して完成するものであり、特定の箇所ばかりを読んだり、特定の箇所だけで聖書全体を判断したりすべきものではありません。もちろん全てを読み通すことは容易ではありませんが、“つまずき”を感じた時も、「いつか分かる時が与えられるだろう」と主に信頼し、変わらずに心を開いて読み続けるのです。時を経て再び同じ箇所を読んだ時には、きっと全く違う思いが与えられ、大きな喜びと平安を感じることでしょう。聖書を信仰の規範とする私たちの歩みは、生涯を通してこのような営みを繰り返すものなのかもしれません。



話してみましょう

- 一人で聖書を読む時間を、持っていますか。
- 聖書に対して、赤ちゃんのような素直さで心を開けていると感じますか。あるいは、そうすることに難しさを感じますか。
- お気に入りの箇所、または読むのが難しく感じる箇所はありますか。

第9課「従い続ける人生のために」

～6月の約束文～

私たちは、聖書が信仰の規範であることを信じ、その教えに従います。

「教会の約束」を通して「その教えに従います」と神さまにお約束している私たちは、気が向いた時だけ、あるいは教会にいる時だけ従うのではなく、生活の全てを通して従う者でありたいと願います。そうすることの困難さを挙げればきりがありませんが、それに負けることなく御言葉と共に生きるために、どのようなことができるでしょうか。

詩編119編 9～12節

どのようにして、若者は
歩む道を清めるべきでしょうか。
あなたの御言葉どおりに道を保つことです。
心を尽くしてわたしはあなたを尋ね求めます。
あなたの戒めから
迷い出ることのないようにしてください。
わたしは仰せを心に納めています
あなたに対して過ちを犯すことのないように。
主よ、あなたをたたえます。
あなたの掟を教えてください。

1. 人生の地図として

「その教えに従います」という文の「その」が指すのは、文法的には「聖書の」ということになるでしょう。ただ「聖書の教え」と言われると、ひたすらに聖書を読み込み、研究し、理解を深めて実践する…という姿が思い浮かんでしまうかもしれません。「聖書の教え」は「神さまからの教え」ですから、私たちは聖書に書かれた文字や単語そのものに忠実になるのではなく、そこに込められた神さまの導きに対して心の耳を澄まし、聞きしたがっていかうとすることが大切です。

時に、聖書は人生の地図とたとえられることがあります。知らない国や町を歩く時には地図が欠かせません。聖書を、人生と言う道なき道を行くための地図とするならば、ひたすら地図と睨めっこをして、地図そのものを暗記しきってから歩こうとするよりも、おおよその検討をつけたら歩き出し、何度も地図を参照しながら目的地を目指した方が、心の余裕もあって良い旅路になると思います。迷うたびに、いや迷う前から日常的に、「神さま今はどちらに行けばよいですか」「この道で良いですか」と問うように聖書を開く生き方こそが、「教えに従います」という約束の実践に繋がるのではないのでしょうか。

詩編119編 105節

あなたの御言葉は、わたしの道の光 わたしの歩みを照らす灯。

2. 思いを分かち合う

聖書を通して御言葉に触れる方法は、一人で黙読することに留まらず、様々な方法があります。礼拝の中での解き明かし（宣教）は、神さまの思いを知る大切なひと時です。語るのは人間であっても、その言葉の中に神さまからの示しや導きが必ずあると信じて心を開きつつ聞くことが大切です。

また、この成人科の学びも含めて、信徒同士で共に学ぶ機会も、必ず信仰生活に欠かせない豊かなひと時となるでしょう。教派によっては、信徒が自由に聖書を読んだり、解釈したり、語り合ったりすることを良しとしない場合もあります。私たちが各々で聖書を読んだり語り合ったりしているのは、実はバプテスト教会ならではの恵みでもあるのです。

たとえ同じ箇所を読んでいても、心に強く響く部分が違ったり、与えられる思いが違ったりすることは、混乱ではなくむしろ喜びであり、互いの思いを聞きあうことでより深く神さまの教えを知ることが出来る、と信じるのが私たちのなのです。そこに、信仰歴の長さや、知識の量などは関係ありません。

3. 心を静めて御言葉に聞く

礼拝における解き明かしや、信徒同士の分かち合いと同じように、自分と神さまの一对一の時間を持ち、祈りつつ御言葉に触れていくことも大切です。『主よ、お話しください。僕は聞いております』（サムエル記上3：9）という思いをもって、日々御言葉を心に受け取りましょう。

～「読み方の例」～

【毎日続けて読む】

- ・朝や寝る前など決まった時間に聖書を開いて読む。
- ・一日に一章など決めた範囲を読む。
- ・決めると負担になる場合は1文字でも読むつもりで。時間が取れる時は続けて読む。
- ・誰かと励まし合いながら読む。

【テーマや方法を決めて読む】

- ・聖書の66巻の一つずつ読んで、それぞれの主題を見出す。
- ・登場人物の生涯を辿り、彼らの人生から学ぶ。
- ・「愛」「救い」「悔い改め」、特定テーマについて学ぶ。
- ・各章の学び、繰り返し読み、テーマを見出し、鍵となる聖句を書きとめる。
- ・重要と思う聖句を暗記する。
- ・出来れば書き込み用の聖書を用いて、なんでも印をつけて書き込みをする。

【通読にチャレンジする】

- ・1日に決められた量を読み、聖書を最初から最後まで読み通す。（1日に4章ずつ、旧約2章・新約1章ずつで、およそ1年で通読できます）
- ・アプリや書籍の中にも、通読スケジュールが示されるものがあります。



話してみましょう

- ・日常の中で、聖書のみ言葉に触れる機会を持っていますか。
- ・通読を通して与えられた恵みを分かち合いましょう。
- ・聖書を読む上で助けとなるアプリや書籍があれば、紹介しましょう。

第10課「キリストが地上に残された教会」

～7月の約束文～

私たちは、この教会が人によって成ったものでなく、神によって成ったものと信じます。

「この教会が」と言うときに、私たちはどのような教会の姿を思い浮かべるでしょうか。目には見えない普遍的な公同教会でしょうか。それとも目に見える私たちの各個教会である常盤台教会でしょうか。教会と言えば十字架が掲げられた建物を連想してしまいましたが、教会はイエス・キリストが神の御計画に従って、ご自身の十字架での血潮と愛を注いで、この地上に残された信徒の共同体・集まり(エクレシア)であり建物ではないのです。

エフェソの信徒への手紙 2章19～22節

従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

1. エクレシア

ギリシア語でエクレシアは「人々の集まり」を意味します。新約聖書では主イエス・キリストを信じた人の群れ・集まりを教会(エクレシア)と呼びました。教会はキリストによって、キリストのゆえに存在するものなのです。

2. 神の家族

「教会は家族のように暖かい雰囲気があっていいですね。」と言われることがあります。教会は「家族のようなもの」ではなく、教会は「神の家族の集まり」なのです。神の家族の関係は、実際の血縁関係よりも長くながく続く関係であり、神の家族の一員となることを神は待ち望んでおられるのです。

コリントの信徒への手紙一 12章12～13節

体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

3. 公同の教会・普遍的な教会(見えない教会)

聖書では「教会」を二つの意味で表しています。ひとつは歴史上のすべてのクリスチャンを指して使われている場合で「普遍的教会」と呼びます。どのような宗派であろうと、どこの国に住んでいようが、イエス・キリストを主と信じているクリスチャンは「普遍的教会」の一員です。キリストに出会い、キリストに人生を委ねたときに神の家族の一員となり、過去、現在、未来にわたって臨在されるキリストのもとに招き、選ばれ集められた教会であって、その全体がひとつの教会・礼拝共同体「公同の教会・普遍的教会」であり続けるのです。

参考図書 聖書教理がわかる94章

4. 地域・各個教会(見える教会)

神の家族とされた私たちは養い育ててくれる特定の教会につながる必要があります。もうすでに目には見えないが普遍的教会の一員であれば、あえて特定の教会に属さなくてもいいのではと考えた事はありませんか。私たちはキリストに人生を委ねることでクリスチャンとされました。そして、バプテストの群れに加えられた私たちは救いの明確な自覚的信仰により神と人(他のクリスチャン)に自分自身を委ねて仕えることを決心します。この信仰告白によりキリストが建てられた地域・各個教会に自分の意思で一員となるのです。この各個教会での神の家族の交わりで与え、与えられ、仕え、仕えられ、慰め、慰められ、励まし、励まされ、愛し、愛される交わり・コイノニア(相互牧会)の恵みに与る幸いな人とされていきます。



話してみましょう

- 教会にどのようなイメージを持っていますか。
- 「これが私の教会です」と、どのように紹介できますか。
- 正直言って、教会の人間関係に悩むことがありますか。

第 11 課「人によって成ったものでなく」

～ 7 月の約束文～

私たちは、この教会が人によって成ったものでなく、神によって成ったものと信じます。

教会は主イエス・キリストの尊い犠牲と愛により、この地上に存在しています。教会の頭は人間ではなく、イエス・キリストです。神であるイエス・キリストがご自分の贖いの血をもって招き集められた人々の集まりが教会ですから、人間のものではなく、神のものなのです。神はご自分のものである教会を責任をもって世の終わりまで守り、導いてくださるのです。教会はキリストなしでは存在できないのです。人の力によるものではないのです。

エフェソの信徒への手紙 1 章 20～23 節

神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

1. キリストの体

教会はキリストの体であり、キリストは教会の頭です。私たち一人ひとりはその肢体の一部を構成してキリストに繋がっていると例えられています。それは手であったり、足であったり、あるいは耳、目と聖霊により与えられた賜物によりキリストの体の一部を構成しています。もし、手や足が切り離されたりしたらキリストの命に与ることができなくなるように、私たちがキリストの体なる教会から離れるのであればキリストの命を失うことにもなるのです。

ローマの信徒への手紙 12 章 3～5 節

わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。

というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。

2. キリストに結ばれて

私たちがキリストの体の一部分とされるのは神の恵みによるものです。それは他の部分と共に一つひとつが神のみ心により結ばれ、キリストの体を築く者とされたのです。自分がどう働きたいか、何をしたいかによってではなく、神の深いご配慮により働きが定められているのです。自分を過大評価したり、人と比べるのではなく慎み深く神のみ旨を思い自分を見つめること、それには一人ひとりが神との関係のなかで神に仕えることができればよいのです。

エフェソの信徒への手紙 4章11～13節

そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです。

こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。

3. キリストの教会を建て上げる

主イエス・キリストは教会を建て上げるときに、教会の働きのために職分をお立てになりました。これらの職分に共通していることは「神の言葉を語る」ことです。教会が何かギスギスしていたり、教会が意見が割れて分裂しているように思えるときがあるかもしれません。もしかすると「神の言葉」を聴くことを忘れ、「人の言葉・思い込み」が神の言葉に代わってしまうことがあるかもしれません。バプテストの特徴のひとつとして会衆主義がありますが、神の声に聴くことの少ない会衆主義であってはならないのです。

それゆえに教会の約束を起草した人たちは「人によって成ったものでなく」の言葉を私たちの戒めとして記したのではないのでしょうか。歴史のなかで真の教会は二つのことを守ってきました。第一には教会では神の言葉である聖書が正しく説教されていること。第二にはバプテスマと主の晩餐式が正しく執行されていることです。すなわち教会は人ではなく神を中心とした共同体なのです。その神が生きて働かれていることを私たちが知る方法は唯ひとつ聖書のみです。だからこそ教会は神の言葉を取り次いでくださる牧師を招聘するのです。



話してみましょう

- 神により与えられた奉仕だと気づいたことはありますか。
- 祈りよりも、行動することが大切だと思ったことがありますか。
- 教会が聖書に記されていることを正しく語っていないと感じたことがありましたか。

第12課「神によって成ったものと信じます」

～7月の約束文～

私たちは、この教会が人によって成ったものでなく、神によって成ったものと信じます。

「神によって成ったものと信じます」とは、神の力により御業が成し遂げられたとの喜びと感謝の宣言です。それを神の一方的な恵みのなかに現わされたものであると信じて告白しているのです。教会は建物を指すものではありません。世界では荘厳な礼拝堂や教会が数多く存在します。その大きさ・荘厳さはそこに集い招かれたイエス・キリストを主と告白する人たちの信仰の見える形ではありますが、地域教会・各個教会はその大小に神の教会としての違いはありません。世界のどの地に建てられた教会も、神の栄光を現す教会としてあるのです。私たちは主イエス・キリストを信じた群れとして集められたのは、人の成せるわざではなく神の愛によるものと信じているのです。

エフェソの信徒への手紙 4章16節

キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのこの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。

1. 愛により生きる教会

教会はキリストの愛によって結ばれた人たちの交わりでもあります。教会は神の家族です。私たちの血縁の家族では規則というよりは関係を基としています。教会では信仰は同じであっても背景の異なる様々な人たちが招かれています。集団をまとめてゆくためには組織や規則を用います。そのため規則に頼るということがおきていきます。規則に頼りすぎると対立が起こり互いの関係性が深められないことがあります。教会でも時折、心を痛めるようなことが起きますが相互に信頼という確かな関係性があれば解決の糸口になるかもしれません。キリストは関係性を大切にされています。教会は規則に縛られる組織ではなく愛の関係性にあるキリストの体です。教会に招かれた私たちを結んでいるのはキリストの愛だけです。私たちはこのキリストの愛を見出し、見つける信仰の目が必要なのです。

ヨハネの手紙一 4章10～12節

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。

いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。

2. 互いに愛し合う

誤解を恐れずに言えば、教会で信仰生活を送ることは簡単ではないと言えるでしょう。クリスチャンとなった私たちも完全には罪の縄目から解放されている訳ではありません。しかし、教会に繋がりを続けることで神の子とされる希望が与えられます。教会を組織と観てしまうと、苦しみや痛みからの回復が困難で共に生きるよりは批判したほうが楽だとさえ考えてしまいます。教会の関係性は「交わり・コイノニア」です。教会の交わりは受ける場所ではなくて、ささげる場所です。時として共に生きることは辛く、愛することを選ぶことにためらいを覚えることがあります。しかし、それでもイエス・キリストは共に生き、愛することを選んでくださいました。キリストに倣う者として互いに愛し合う信仰共同体であることを喜びたいと思います。

ヨハネによる福音書 16章13～14節

しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。

3. 助け主・聖霊の神に依りたのむ

教会の使命は、この世界でキリストの代わりに生きることです。それはキリストが模範として示してくださったことを示し、教えてくださったことを忠実に行うことです。それをひと言で言うならば「キリストの愛」を行うことです。しかし、救いに与った私たちはなおも罪ある存在のゆえに神に依りたのむことなしにはキリストの体なる教会を建て上げていくことはできません。聖霊・助け主である神の力が必要です。この力は教会に招かれた私たちが神から与えられた新しい掟である「互いに愛し合いなさい」に生かされた「交わり・コイノニア」が実現しているときに、さらに豊かに与えられるのです。



話してみましょう

- あらためて「教会はどうして必要なの」と問われたら、どう答えますか。
- 教会には社会一般にあるような組織と規則が必要だと思いますか。
- 聖霊なる神の力をどのようなときに感じますか。

